



第2分科会

「句会ライブ」

夏井 いつき 氏

(俳人・エッセイスト)



- ・俳句集団「いつき組」組長
- ・創作活動に加え、全国の小中高
生、教員・PTA対象の講演活動
や俳句の授業（句会ライブ）を精
力的にこなしている
- ・テレビ、ラジオ出演多数
- ・平成27年、俳都松山大使に就任

第2分科会は百五十名を超える参加者があり、全体会同様大ホールで行われた。講師の夏井いつき先生は全国で今回のような句会ライブを開いておられ、時には参加者が千五百名を超える時もあるそうである。これだけ多くの参加者全員が俳句を作り、その俳句の中から、短い時間でどのようにして俳句を選んでいくのか、興味を持ってこの分科会に参加した。

前半は夏井先生の講義、そして実際に参加者が俳句を創作、その後先生が選出された「特選七句」の中から最優秀の俳句を参加者全体で決定するという流れであった。我々国語の教員が俳句創作の授業を展開すると、まずテーマ（主に季語になる）を与えて、それをもとに創作させるという流れが多いが、それは非常に高度で、かつ創作が難しいという話から講義は始まった。そのような俳句の作り方を「一物仕立て」といい、季語のことだけで十七音すべてを成立させ、かつオリジナリティを感じさせるものに仕立て上げなければならぬ。例えば、「紅葉」という題だとすると、これで作品としてオリジナリティのある句を作るには、相当な観察眼を必要とする。さらに、それを発見できたとしても、十七音という短い字数で描写しなければならぬ。俳句の初心者では簡単にはできないのである。そこで、先生はもうひとつの俳句の作り方「取り合わせ」を提案される。これはまず季語とは関係ない十二音を考えて、あとからそれに見合う五音程度の季語を上五または下五に加えるという方法である。季語以外の十二音を「俳句のタネ」と呼び、この部

分に他人が思い付かない出来事を探してまとめ、配布された季語集から、その十二音に合うものを選んでつなげると出来上がる。実際に創作する際には、以下の三つの注意事項を守ると良い作品になると教えてくださった。

- 1 俳句のタネからつくる。
 - 2 十二音に季語っぽいものを入れない（季重なりを作るのは難しい）。
 - 3 季語の入れ方に注意。自分の感情を代弁してくれる季語を探す。
- さあ、いよいよ実作である。参加者が作ったものをすぐに先生がご覧になり、評価を下す。特選七句・面白い十句余り・その他に分類していく。ほとんど瞬間芸である。そして、特選七句をスタッフがコンピュータに入力している間、「面白い」俳句を先生が読み上げ、それぞれの作者と先生が会話をする。一つ一つの俳句に対して、想像力が広がる瞬間を体感した。

そして、特選七句（以下）の発表である。それぞれの句の作者は分からない。自分が気に入った句を選び、どこが気に入ったかを参加者が発表していくうちに、どの句が一番良かったかを、すべての参加者自身が決めていく。

冬ぬくし犬はあくびで会釈する

再会の時までここで小鳥来る

空つ風会議の窓に顔三つ

冬の月再会までの鉛色

冬の滝昔の僕に会いました

天高し水面よ記せ風の会合

木枯来21時の会議室

個人的には、三番目の句が気に入った。

会議室にいる三人は生徒・保護者・先生で、この時期に本人にはつらい話を先生がしているのだろうと私は想像していた。実際は職員会議でつまらなそうな顔をしている人が自分を含め三人同時に窓に映っているという場面だったそうだ。読む人によって場面が幾重にも想像でき、解釈が広がっていくのが良い俳句であるという先生のお言葉が最も印象深かった。ちなみに最優秀には五番目の句が選ばれた。

